

第 1 章

複合キャリアとは何か

神田 道子

1 複合キャリアとは

キャリアは、社会的役割活動、それによって位置づけられる社会的位置・地位の軌跡をいうが、これまでキャリアは職業のキャリアとイコールにとらえられてきた。これに対して複合キャリアは社会活動をキャリアに加え、職業キャリアと社会活動キャリアを構成要素とし、両者の複合の視点からキャリアをとらえる新しい概念である。

複合キャリアは、生涯にわたる時間軸と、その一定時点・場面という空間軸によってとらえ、二つの要素である職業キャリアと社会活動キャリアの両要素の構成状況、その相互関係を、そして時間軸では、変化・形成の過程を重視し、分析・解明する。また、社会と個人を結ぶキャリアの特質を発展的にとらえ、キャリアの機能として、社会的側面として社会への影響と、個人的側面として個人への影響を生涯発達の点からとらえ、さらにその相互関係を解明することを重視する。

2 今、複合キャリア概念を提示する意味

キャリアの多様化

個人の社会的役割活動、その反映としての社会的位置・地位の軌跡であるキャリアは、これまで、イコール職業キャリアとしてとらえられてきたが、NPO活動など新たな社会活動は、職業と社会活動の垣根をあいまいなものにした。もちろん、これまでも消費者運動や労働組合運動などの事務局専従職員等は職業として位置づけられ、キャリアのなかに含めてとらえられてきた。だが、多様な社会活動、さらに多様な関わり方が広がるに従って、職業と社会活動の境界がしだいにあいまいな状況がみられるようになった。1998年の「NPO法」の制定は、さらにその傾向を拡大し、加速した。それらの活動を行う人をキャリアの視点からみたとき、職業キャリアという単一な概念ではとらえられなくなってきたのである。また、趣味、学習など私的な活動が社会活動へと発展していく状況もあり、こうしたことを、すべてを含むものとして「多様なキャリア」という捉え方がなされるようになった。それに大きく影響したのが文科省が設置した女性の多様なキャリアを支援するための懇談会による「多様なキャリアが社会を変える」第2次報告（「女性のキャリアと生涯学習の関わりから」平成15年10月）である。その後「多様なキャリア」は結婚、育児、教育・学習などのライフイベントを含めるところまで拡大解釈され、社会的役割としてのキャリアの意味が不明確になる傾向さえ生んでいる。

このように社会活動が多様化し、職業と社会活動の混合した活動が広がるというキャリアめぐる実態の変化、さらに実態を拡大して捉える傾向が広がってきた中で、職業のみのキャリア概念からまさに多様なキャリア概念が提起されているのが現在である。

「複合キャリア」はこうした実態に対応した新たなキャリア概念である。多様化するキャリア概念のなかで「複合キャリア」の特徴は前述したように、

I 複合キャリア

キャリアを直接的な社会的役割—社会的位置・地位の軌跡とし、職業だけでなく社会活動をもキャリアとしてとらえ、この二つの複合としてキャリアをとらえる点である。学習・教育、趣味などの個人的な活動、結婚、出産などのライフイベント等はキャリアとしてはとらえず、キャリア形成に影響、関係する要因として位置づける。それは、かつて女性が子どもを産むことを社会的なものとして「国家的母性」などとして捉えられたことを考えると、私的領域と社会的・公的領域とを分けてとらえることが必要と考えるからである。私的領域を支え、関係する共通基盤としての社会的・公的領域というところらえ方である。個人の活動の軌跡には社会的活動と私的な活動があり、キャリアは前者の活動の軌跡ととらえる。子どもを産むことも、結婚することも社会的といえいえなくはないが、そこまで拡大解釈すると生きていること自体、社会を形成し維持していくこととなり、あえてキャリア概念をたてる必要はなくなる。「キャリアの多様化」がいわれるなかで、今、ライフコースとキャリアパスとの差異が不明確になってきている。キャリアは個人の経験のうちの社会的役割—社会的位置・地位の軌跡という社会的側面であり、それを動的な側面としての役割活動面と、その静的な側面としての社会的位置・地位としてとらえる点にキャリアの特性がある。

「社会活動キャリア」の可視化

多様化するキャリアの変化を背景にしているのが「複合キャリア」であるが、これは、これまでの職業キャリアという単一のキャリアに対して、社会活動をキャリアに加え、キャリアを二つの構成要素によってとらえるのである。したがって、なぜ今、複合キャリアかの問いの第一は、なぜ今社会活動をキャリアととらえるのか、である。

これまで職業以外の社会活動は存在した。存在したばかりでなく、社会形成に大きな役割を果たしてきた。これらの活動は、生活という視点に立ち生活を支える共通基盤である地域をつくる活動、消費者の立場からの活動、人権に関わる問題、子どもの問題などの社会的問題への取組みとして行われ

てきた。これらの活動の多くは地域に密着した活動として、主婦である成人女性層が活動の担い手として大きな役割を果たしてきた。だが、社会的に重要な活動であるにもかかわらず、キャリアとしてはとらえられてこなかった。その背景には職業中心の社会システム、考え方の存在とともに主に女性が担ってきたために可視化されてこなかったのではなかったか。女性の場合、職業は個人としての活動として明確であるが、地域活動では特に主婦の場合、その社会的地位は夫によって規定される場合が多くみられ、個人としての社会的地位・地位が必ずしも明確にとらえられてこなかったことが影響していると考えられる。

しかし、こうした状況は変化し、個人としての立場で活動する女性が増加するにつれて、社会活動を個人の役割とする考え方が少しずつ広がっていった。と同時にその活動は地域形成においてなくてはならないものとして重要性をまし、それを社会的にも認めるようになっていった。実際、パワーをもった女性が地域で多く見られるようになり、大きな役割を担っていることが顕在化した。こうした状況の中で社会活動のキャリア化、そして「社会活動キャリア」を可視化する必要性が増していったとみている。

生涯にわたるキャリア把握

では、なぜ複合キャリアなのか、それは実態にもとづくものである。前述した多様化は、二つの要素の組み合わせの多様化として現れている。一定の時点（空間軸）でのキャリアパターンをみると、職業キャリアと社会活動キャリアを同時並行的にすすめている人は多い。また、それぞれのキャリアの内容も多様である。

特に複合キャリアという把握が必要なのは、キャリアが生涯にわたる社会的役割の軌跡であることと関係している。生涯という視点（時間軸）から見ると、これまでも女性は職業キャリアから社会活動キャリアへ、そして再就職して職業キャリアへというような多様なキャリアへの移行が見られた。つまり、長期的にみると、時間的経過にともなってキャリアが変化しており、

I 複合キャリア

複合キャリアを形成してきた。さらに高齢者の増加により職業キャリアから社会活動キャリアへの移行型や、職業キャリアと社会活動キャリアの両方を取り入れるという並立型が多くなっている。高齢社会においては、高齢者もまた社会的役割を担うことが期待されるとすれば、複合キャリアとなるだろう。つまり、生涯にわたるといふ長期的キャリア把握を基本視点にもち、かつ高齢社会への対応という社会的視点からも、そして高齢期の生き方という個人的視点からも、複合キャリアが、実践的にも意義をもっている。高齢期の生き方として、キャリア形成視点を取り入れると、それは「複合キャリア形成」となる。高齢社会の活性化は個々人の複合キャリア形成と平行して進むのではないだろうか。

社会・地域形成人材の育成

男女共同参画の推進は今日もなお依然として社会的課題である。とりわけ生活重視は社会的共通基盤としての地域社会の創生を課題としている。「個の尊重」がともすれば、自分中心・自分だけの尊重として定着し、孤立化が進んでいる現在、「自他の尊重関係」にもとづく地域社会形成が重要な社会的課題になってきている。それには男女がともに能力を発揮し、共同して社会形成に参画していく自他の尊重を基本におく男女共同参画の推進は不可欠である。そのための基本になるのが、参画する人材の育成であり、その人材育成と直結しているのがキャリア形成なのである。

職業キャリアは、個人としての能力発揮、経済的自立を重視し、職業社会の中でいかに有利にそれを行い、社会的地位を獲得していくかに傾斜する傾向がみられた。また、職業を通じて社会に参加はしても社会形成に参画するのは難しい状況がみられたが、職業キャリアをもつ女性の増加、そして男女共同参画の政策動向は、職業社会形成にも新しい波を生んでいる。女性の視点に立つ活動は、ワーク・ライフ・バランスの推進など社会的共通基盤形成の活動を広げている。

今、社会・地域形成は、国・地方公共団体にとっても、家族・個人にとつ

ても重要課題である。それにはその担い手の育成が必要とされる。そうした社会的役割を担う社会人材の育成、エンパワーメントこそが基本的な課題なのである。社会活動キャリアを生きている人たちが実際に地域社会形成の活動を担っている。だが、経済的自立など多くの困難をかかえており、問題は多いものの現状のなかで地域形成に参画する社会人材の育成は喫緊の課題である。問題を抱えつつも長期的な展望をもち、積極的にとりくみ活動をすすめる人材の育成が基本的課題である。

この社会人材の育成、エンパワーメントと深く関連するのが複合キャリアである。社会的課題を自分に引き寄せ、狭く限定された場の中での自分だけの経済的自立、能力発揮にとどまらず、自分にとっても必要な社会的共通基盤づくりという社会的課題を、自分自身の課題として取り込むのに有効なのが「複合キャリア」アプローチである。特に、成人を対象にした学習は地域づくり人材の育成には有用である。社会形成という社会的側面と、生涯発達という個人的側面の二側面を、しかも個人の生涯という視点で捉える複合キャリア・アプローチは、社会的要請と個人の発達の両者を長い時間的スパンでとらえ、関係づけるという特徴をもつ。

社会的側面が重視される人材育成において個人の生涯発達との相互関係を重視するということは、個人志向的傾向が強く、しかも自分重視として広く浸透している状況のなかでは、それが学習や活動のモチベーションになることが多い。自分にとってどれだけプラスがあるのかを重視する個人の意識の現状から出発することは重要である。個人への影響に加えて社会への影響の両面からのアプローチは社会活動を自分のこととしてとらえ、自分へのプラスを見出すことを可能にする。また、生涯発達という生涯学習と重なるこのアプローチは、自分自身の人間形成という点から受け入れやすい面をもつ。これらの点から見て、社会人材育成において複合キャリア形成アプローチは重要であり、有効性が高いと考える。

国立女性教育会館の中核となる社会・地域形成人材の育成支援と複合キャリア

国立女性教育会館は、教育・学習面から男女共同参画を推進することを役割とする生涯学習機関である。その中核をなすのが男女共同参画の視点にたつて社会・地域形成をすすめる人材の育成、エンパワーメント（力量形成）である。これは、これまで継続して指導者研修として行われており、地域人材育成に大きな役割を果たしてきている。国内だけでなく、アジア太平洋地域の国の指導者のエンパワーメントにもとりくんできている。相談担当者、情報担当者等の研修事業にしても、また交流事業にしても人材育成・エンパワーメントという性格をもち、それが会館の大きな特徴であり、存在の重要な柱になっている。いわば人材育成、エンパワーメントは中核にある軸といてよい。それを生涯学習として行っているのが会館である。研修に参加した人たちが地域で活動した実践活動と研修のらせんの学習システムを開発するなど新たな方法を開発し、実際に、地域人材の育成を支援してきている。

男女共同参画を推進する社会・地域人材の育成は公共性を前提にしており、国立女性教育会館は、公共性をもち、公正、効率性を特徴とする独立行政法人の制度がよく機能している例といえる。

社会的側面と個人的側面をつなぎ、しかも生涯の視点を持った社会・地域形成人材を育成、エンパワーメントを支援することは会館が生涯学習機関としての特徴を明確にすることでもある。加えて、キャリア形成アプローチによる人材育成支援では、すでに研究上の蓄積があり、現在も研究をすすめていること、キャリア形成という点からの先駆的女性のアーカイブ史資料の蓄積、研修、交流事業など、すでにその方向で歩んでいるのが国立女性教育会館であり、国にとっても地域社会にとっても男女共同参画をすすめるのに重要な役割を担っている。その重要な役割である社会人材育成を具体的に進めていくのが、複合キャリア・アプローチなのである。

3 必要とされる研究課題

複合キャリア研究の基本的な視点

複合キャリアは多様化、融合化など変化しているキャリアの実態を把握する、いわば実態変化に対応した概念であり、とらえ方である。

そこで重要な点は、主として女性が行ってきた社会活動を可視化し、これらの活動の社会的役割としての意味を明確にするという意味をもっている。これは女性を研究対象として可視化するという「女性学」につらなる視点にたつ概念でもあり、男女平等、さらに男女共同参画という平等化への道につながっている。

社会活動をキャリアとしてとらえるという「複合キャリア」概念は、単に女性の社会的評価、地位の向上として意味を持つだけでなく、地域社会形成、高齢社会への対応、さらに男性のキャリア形成等の実践的課題に対応するものであり、実践に直結する内容が求められる概念であり、とらえ方なのである。

これらは、複合キャリア研究の基本的視点に結びつく。それは一つにはキャリア実態の変化を把握し、明らかにする視点である。第二は、女性問題、男女共同参画の視点である。第一の実態の変化もまた、この第二の視点にたつ把握であり、その点では分析の方向軸が明確であるということでもある。第三には、単に複合キャリアの分析にとどまらず、実践課題に対応できる、実践性の視点である。

そこで複合キャリア研究は、実践との距離によって実践と直接結びつく研究とその基礎となる研究の両者が必要とされる。以下で、現時点で必要とされる具体的研究課題をあげる。

複合キャリアの実態と問題・課題把握に関する研究

実態の解明にはまず現在の時点での複合キャリアの内実を明らかにする必

I 複合キャリア

要がある。そのために職業キャリアと社会活動キャリアの二要素の複合のしかたを解明する必要がある。その上で現状におけるキャリア形成活動の実態と問題を明らかにすること、そして問題の分析によって、現状におけるキャリア形成の課題を明示することである。

社会活動キャリアについては、その社会的役割、社会的地位等、基本になることの解明も十分とはいえない状況にあり、研究課題は山積している。

年齢、ライフステージ、性別、世代などによる実態把握分析が必要である。現状把握の年齢別分析によって、社会的な意味での時間的変化の把握に結びつくことになろう。

またライフコース要因の影響も大きいとみられ、ライフステージとの関連などは基本になる研究課題である。

複合キャリアの形成過程に関する研究

現時点での実態、問題把握と同時に形成過程の解明・分析が必要になる。形成過程は教育・学習等の個人要因、家族要因等のほかに、男女共同参画に関わる時代的状況要因が共通基盤として影響する。共通の時代状況を前提においた上で、個別要因を明らかにする必要がある。戦前社会という性差別を基本においた社会の中でキャリアを形成した女性の研究は、そうした歴史的な社会基盤との関係で形成過程を明らかにする研究として重要である。

この過程研究においては、社会状況との関係を基本において具体的にその過程を明らかにしていく必要があり、「きっかけ」「困難」「その乗り越え」などのキャリア発達という視点からの解明と、それを支援し促進した要因分析、人間関係要因、学習要因等との関わりを明らかにすることは、実践研究として不可欠である。これらの過程分析には事例研究が必要になる。

複合キャリアの社会的影響、個人的影響そして相互関係に関する研究

キャリアは前述したように個人と社会を結ぶ機能をもっており、そこに焦点化した研究が必要とされる。社会的影響と個人的影響との関連の視点から

の分析である。特に、キャリア形成が男女共同参画の推進にどのように影響したかは、社会的にみても大きな課題である。同時にそれが個人としての成長、発達に結びついていることが、地域活動への参画の誘因としても大きい。この相互関係がプラスに展開し、発展していく過程、そこに影響する要因や社会条件等を明らかにすることは実践という点から是非必要である。

生涯学習の重要性は明らかではあるが、それが個人的側面に偏りがちな傾向がみられ、社会形成に結びつきにくい状況が広がっている。高齢社会はそれに拍車をかけ、趣味的な学習や活動に結びつく傾向がみられ、地域社会形成、社会参画とは距離をおいた生涯学習として受け入れられている傾向がよいなかでは、特に相互関係の分析が重要になる。社会的役割活動としてのキャリア形成が個人の生涯発達に結びつく実態、その関係にプラスに作用する要因や要件を明らかにすることは、生涯学習という点からも社会参画という点からも重要な研究課題である。

上にあげた研究は、複合キャリア研究において基礎的位置を占める。多様な対象についての知をつみあげることが、実践への有効性を高めることにつながる。

社会・地域形成人材についてのキャリア研究

上にあげた研究は、複合キャリア研究の基礎部分をなすものであり、研究をつみあげていく必要があるが直接、実践に結びつく研究として今、求められているのは、社会・地域形成人材の育成、エンパワーメントという実践課題に対応した研究である。実践的研究としての基礎部分は単に多様な層について実態、形成過程を解明していただくだけではなく、実践課題に関わる解明が必要となる。それが地域活動やNPO活動のリーダーの形成過程の解明に結びつき、そこでプラスにあるいはマイナスに作用している要因を明らかにすることは、人材育成の推進という実践にとって欠かせない。特に国立女性教育会館の研究は会館の役割という点からも、この視点からの研究に力点をおく必要があり、それを通して、前述の一般的な意味での複合キャリア研究の

基礎的研究部分の蓄積に寄与することになる。

キャリア学習・教育実践のためのプログラム開発に関する研究

キャリア形成に直接、結びつくのが学習・教育であり、そのための学習・教育プログラムの開発は実践研究として欠かせない。前述した基礎的研究も一人ひとりのキャリア形成に、より効率的・意図的に結びついていくのも学習を通してであり、明確な目的、方法、内容をもつプログラム開発は実践に直結した研究という性格をもつ。

学習プログラム開発研究は教育・学習の実践の中で行われ、さらに実践の分析、結果についての検討など一連の流れを必要とする過程を持つ。その点で学習現場でのアクションリサーチ、参与観察等の研究方法をとることになる。

実践的課題という点から学習プログラム開発研究として重視されるのが、社会・地域形成人材の育成であり、そのための学習プログラムの開発である。会館における基本課題であることは、すでに述べた通りである。したがって人材育成、エンパワーメントのためのプログラム開発は研修実践の基礎としてこれまでも取り組んできている。筆者は学習目標課題という点から、その構成要素をA意識・視点の形成等の基点・基軸の形成、B①実態・課題把握、B②課題解決の方向、過程の把握（2011年12月修正加筆）、C問題解決・実践力の形成、D省察力、協働力等の共通基盤の形成においた（「男女共同参画時代の女性人材育成—社会的背景と学習課題」『NWEC実践研究』第1号、12頁）。また、会館では目的、方法を示したプログラムデザインの作成もすでに行ってきており、研修、交流事業の企画・実施にあたっては必須になってきている。今後はさらに複合キャリア形成という点からの学習プログラム開発が必要とされる。

この社会・地域形成人材の育成、エンパワーメントのための学習プログラム開発と並んで教育・学習実践のために必要度の高いのが、キャリア形成において節目になる時点での学習に必要な学習プログラム開発である。大学卒

業一就職という節目は、大学などでもキャリア教育として行っているが、これら教育プログラムについて、さらに生涯を視野に入れた上で長期的視点、就職という短期的の視点をとりいれた時間軸にたつキャリア形成を支援するプログラム開発研究が必要であろう。これについてはⅢのプログラム開発の各章に実践例が報告されている。

また、定年退職後のキャリア形成は、特に男性の場合には課題として大きい。高齢社会を、そして自分の高齢期を見据え、キャリア形成を支援できるプログラム開発研究が求められている。

キャリア学習・教育推進システムの開発に関する研究

キャリア教育・学習実践にはプログラム開発は必須であるが、実践を推進していくシステム形成が必要であり、それに関する開発研究は今後の課題である。大学では、研究システム、教育システム、就活システム等の連携など、システム開発という面をもって実践の取組みが進められている傾向がみられる。だが、これらのシステムについては、情報提供、情報交換というレベルにあり、研究としてのレベルにいたっていないのが現状である。

しかし、キャリア形成を実践として進めていくには、有効性の高いシステムについて提案し形成していくことが望まれる。学習プログラムに傾斜すると、そのプログラムのみがとりあげられ、学習の場はどこでもよいということにもなりかねない。大学の場合は、教育、研究の場として、社会的に認められており、長い歴史のなかでそのシステムがつくられてきている。したがって、施設とそこでの教育とが切りはなされてとらえられることはない。それに対して、社会教育は、研究的にも学習プログラム開発に重点がおかれている傾向があり、それが学習施設や研究等の位置のあいまいさにもつながっている。より実践性が要求される社会教育においては、学習プログラム開発と同時にそれが実践的に有効に働くシステムについて検討することが早急の課題である。

学習プログラム、システムについても、研究としての取組みが不十分であ

I 複合キャリア

る。経験による取組みだけでは、広がり・継続性に欠ける。実践性を重視し、それに対応するためには研究の積み重ねが必要であるのはいうまでもない。学習プログラム開発研究は、ようやく緒についたところである。システム研究については、まだ経験交流の段階にある。特に、社会教育ではこの視点が欠けており、それが組織・機関としての不安定さにもつながっている。システム開発研究の重要性を指摘しておきたい。

(かんだ・みちこ 国立女性教育会館客員研究員)